

水 振 協 ニ ュ ー ス

(令和元年度号)

編集・発行 (公財) 滋賀県水産振興協会

草津市志那町柿根 1393-2

TEL 077 (568) 3451

FAX 077 (568) 3788

令和元年度の放流事業結果は・・・

- ・「ニゴロブナ 1,309.7 万尾・ホンモロコ 1,134.3 万尾・ゲンゴロウブナ 136.5 万尾・ワタカ 2.6 万尾」を放流！
- ・「人工河川 アユ親魚 13.2 トンの放流」を実施！「25.2 億尾のアユふ化仔魚」が琵琶湖へ流下！

ニゴロブナ

2 cm 稚魚の放流尾数は、水田育成が 923.7 万尾(計画 800 万尾)、栽培漁業センターでの生産放流が 72.4 万尾で、合計 996.1 万尾でした。また、平均体重 20.2 g の大型稚魚 66.2 万尾を栽培漁業センター、平均体重 20.3 g の大型稚魚 32.9 万尾を北山田地先筏(草津市)で生産し、さらに滋賀県漁業協同組合連合会(県漁連)から平均体重 13.7 g の大型稚魚 9.5 万尾を購入し、合計で 108.6 万尾(計画 97.5 万尾)を放流しました(放流内訳は南湖 32.9 万尾、北湖 75.7 万尾)。その他に、県漁連では平均体重 17.5 g の大型稚魚 25.1 万尾を独自事業として北湖へ放流されました。

水田育成 主に沿湖漁業協同組合の御協力により実施し、530.2 反の水田にふ化仔魚換算で 2,199.2 万尾を放養し、約 1 か月後の中干時に 2～3 cm の稚魚 923.7 万尾を琵琶湖に放流しました(放流内訳は南湖 127.6 万尾、北湖 796.1 万尾)。水田からの稚魚の流下率(流下尾数/放養尾数)は約 42%でした。

また、赤野井湾周辺の水田(守山市) 58.5 反にふ化仔魚 205 万尾(計画 200 万尾)を放養しました。水産試験場の調査によりますと、流下率(流下尾数/放養尾数)が約 42%で、約 85.7 万尾の稚魚が赤野井湾地先に流下しました。

放流効果 当協会では種苗放流の事業効果を知るために、令和 2 年 3 月の今冬季に、北湖において小糸網、沖曳網漁業で漁獲されたニゴロブナの標識調査を行っています。今冬季の放流魚の混獲率(漁獲魚に占める放流魚の割合)は調査中ですが、平成 31 年 3 月(冬季)の放流魚の混獲率は 39.3%(前年は 48.9%)でした(北湖での漁獲物 626 尾調査)。それら放流魚のうち、水田放流の稚魚と沖合及

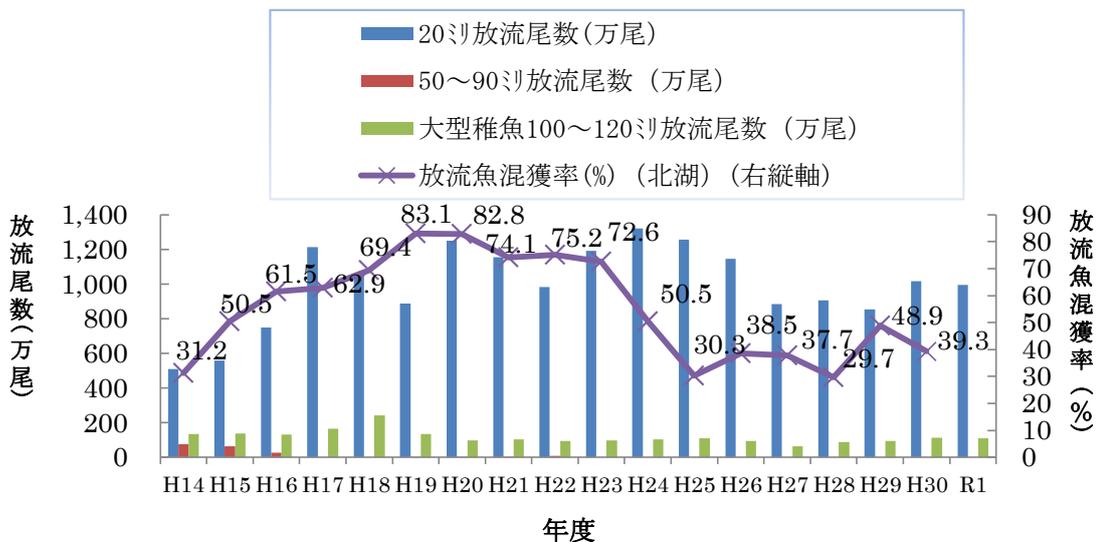
び沿岸に放流した大型稚魚の混獲率の内訳は、各々19.0%と19.6%でした。平成25年度～同28年度までは、北湖での放流魚の混獲率は29.7～38.5%と減少傾向にありましたが、同29年度には再び48.9%と増加に転じ、平成30年度においては前述のとおり39.3%で約9%減少しました。このことは逆に北湖の天然魚資源の割合が増加した可能性がうかがえます。また、平成31年3月～令和元年6月の南湖における放流魚の混獲率（調査尾数301尾）は、52.7%（内訳は水田放流の稚魚が16.8%、大型稚魚が35.8%）で、過去3年間（76.6～79.6%）で最も低い値であり、南湖の天然魚資源も増加傾向であると考えられます。なお、南湖における放流魚の混獲率に関しては、今後も継続して注視していく必要があると思われ



ニゴロブナふ化仔魚を水田で放養



ニゴロブナ大型種苗の放流(北湖)



ニゴロブナの年度別放流尾数(万尾)及び放流魚混獲率(%)の推移

ホンモロコ

水田育成 ニゴロブナと同様に、より放流効果の高い水田の生産力を利用して2～3 cmの稚魚に育ててから、中干時に琵琶湖へ放流しました。詳細につきましては、主に沿湖の土地改良区管内の農業者さんの御協力により実施し、869.7反の水田にふ化仔魚で3,090.8万尾を放養し、約1か月後の中干時に2～3 cmの稚魚930.3万尾(計画900万尾)を琵琶湖に放流しました(放流内訳は南湖67.6万尾、北湖862.8万尾)。水田からの稚魚の流下率(流下尾数/放養尾数)は約30%でした。

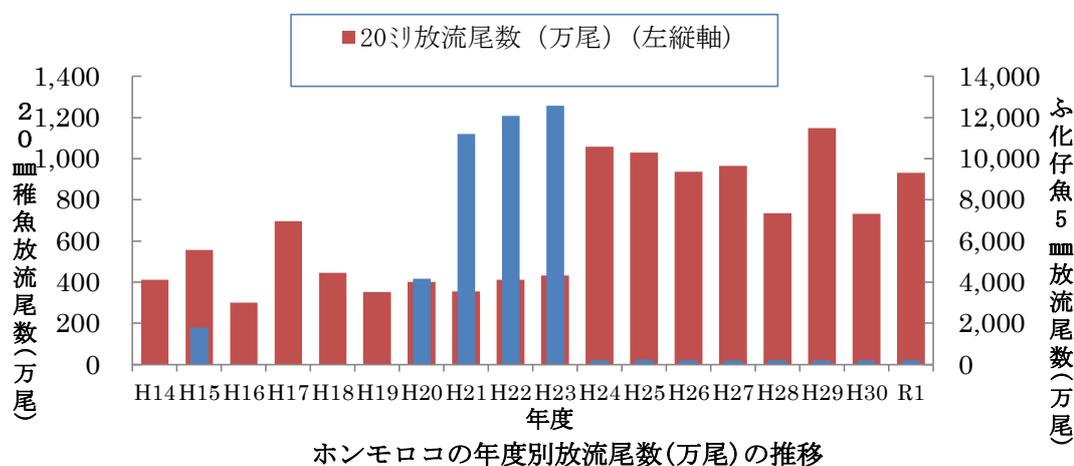
また、赤野井湾周辺の水田(守山市)58.1反にふ化仔魚204万尾(計画200万尾)を放養しました。水産試験場の調査によりますと、流下率(流下尾数/放養尾数)が約24%で、約47.9万尾の稚魚が赤の井湾地先に流下しました。



産卵基体に産着したホンモロコの卵



水田で2～3cmに育ったホンモロコ稚魚



ゲンゴロウブナ

近年、琵琶湖では大型の植物プランクトンなど、単一種が優先する現象がみられ琵琶湖産魚介類の餌環境や生態系への影響が懸念されています。

琵琶湖固有種のゲンゴロウブナは植物プランクトン食であり、特定の植物プランクトンの優占を抑制する効果が期待できます。

そこで水田を活用した効率的な種苗生産放流により、ゲンゴロウブナ資源を回復させることで、多種多様なプランクトンによる安定した魚介類の餌環境、生息環境を確保することを目的として、昨年度に引き続き、事業を行いました。

詳細につきましては、かつてゲンゴロウブナの大産卵場であった早崎内湖(長浜市)の周辺水田及び近年アオコの発生が多い西の湖周辺水田の計 65.1 反にふ化仔魚で 258.8 万尾を放養し、約 1 か月後の中干時に 2~3 cmの稚魚 135.9 万尾(計画 100 万尾)を琵琶湖に放流しました。水田からの稚魚の流下率(流下尾数/放養尾数)は約 53%でした。

また、栽培漁業センターにおいても、ゲンゴロウブナ約 8 cmの稚魚 6.4 千尾を生産し、南湖に放流しました。



産卵基体に産着したゲンゴロウブナの卵



水田から流下した2~3cmに育ったゲンゴロウブナ稚魚の放流(流下調査時)

ワタカ

栽培漁業センターでワタカ約 4 cmの稚魚 2.6 万尾(計画 1.5 万尾)を生産し、主に南湖に放流しました。

また、南湖で漁獲されたワタカ 298 尾について標識調査を行い、その結果、放流魚は、95.2%(前年は 88.4%)を占めていることがわかりました。このことから、南湖においては天然のワタカ資源が非常に少ないことがわかります。



ワタカの標識調査



ワタカの放流種苗(栽培漁業センター飼育池放流前取上検量時)

アユ（人工河川管理運用事業）

令和元年度は、早期放流用の養成親魚として、8月27日～9月3日にかけて親アユ 8,000 kg、242,100 尾を安曇川人工河川へ通常放流しました。また、姉川人工河川へは、9月4日～6日にかけて姉川河口のヤナで特別採捕した天然親アユ 3,787 kg、425,500 尾を放流しました。それら放流親魚の産卵ふ化の結果、9月9日～10月24日にかけて合計で **25.2億尾** のふ化仔魚を琵琶湖へ流下させました。また、9月6日には県の指定により田川上流域(長浜市)へ同じく天然親アユ 1,360 kg、152,800 尾を放流しました。



養成親魚の放流(安曇川人工河川)



天然親魚の特別採捕(姉川ヤナ場)

最後になりましたが、県水産課、県水産試験場及び各関係漁業組合の各位に対しまして、種苗生産、放流及び標識調査にご協力頂きありがとうございました。